



愛知県東郷町 就労支援B型作業所 Zoi

「就労支援B型作業所 Zoi」は、一般社団法人日本福祉協議会機構が扱っている福祉事業の一つである。就労支援B型は、1日のうち数時間だけ利用する雇用契約のない工賃240円が一般的。しかし、就労支援B型作業所 Zoi の工賃は1,140円である。国が示す工賃は時間給300円が Zoi では……。工賃約4倍の謎に臨んだ

濱野理事長から話をうかがったが、福祉に対する熱い思いを感じた。ホームページに掲載されている理事長の「福祉業界自体を変化させないと福祉業界の未来はない。パートナー（利用者）への支援は不可能」。「福祉とは利他行動が1番念頭に無ければ歪な物になる」を引用させてもらった。

スタッフは、障がい者（パートナ）それぞれの個性を尊重し、その特性を生かしていると感じた。Zoi のスタッフがネット上に「ちょっとした違いだけで、障がい者という区分に分ける程ではないと思える人が多いと感じました。」と。

パートナーの仕事内容を知る機会はなかったが、研修後に『福祉を見る』という雑誌をいただいたが、その中にゾイで働くパートナーの気持ちが紹介されていた。

「始業時は、昨晚使ったナプキンを洗濯機から始まりシェフの指示で仕込みを手伝い。いつかは、厨房で料理の盛り付けなどをやりたい」

謎解きは完全には終わらなかったが、理事長、本部長の名刺に「TOMONI」が気になっていたが、時間給1140円が“そうなのかな”というところにたどり着いたような気がした。それは、障がい者を支援するのではなく共に働く友として協同で！就労支援B型作業所 Zoi の TOMINI の精神事業所運営をしているから可能にしていると思った。ギャラリーだった古民家を改装した店でジビエ料理をいただいたが、まさに TOMONI がギューと詰まった料理だった。

愛知県豊橋市 八町小学校「イマージョン教育」

国語と道徳以外に授業を英語で行う公立小学校初となる外国語を手段として言語以外の教科を学ぶ教育方法をイマージョン教育という。イマージョン (immerse) 浸かるということ。

「英語を学ぶ」ではなく「英語で学ぶ」……「を」ではなく「で」⇒こんなに違いがあるのか。まさに“百聞は一見”にしかず!!。

2年生の算数、3年生の理科、4年生の社会の授業参観をしたがヒアリングができない自分にとって、教師と児童の会話がほとんど英語だから行動からなんとなく？こんなやり取りかなと思う。児童は、日本語で話してもいいそうだ。時折、英語の中に日本語で話す児童もいた。(それでも OK)

入学して1年半の2年生でも、先生が何を話しているのか理解しているようだ(ヒアリングができないこちらには、そう取れるとしか言いようがないのだが)。

どの学年も、活発に授業に参加している子どもたちを見て、「楽しく、生き生き」と授業に臨む子どもたちの姿を見て頼もしく思った。スムーズに授業をしているネイティブの英語講師と児童が日本語で丁寧に解説してくれる英語免許を持つ日本人教師のコミュニケーションもいい。ここの行きつくまでには大変な努力と苦労があっただろう。

手を上げる児童が多い。臆することなく英語を使って学ぶことにチャレンジしていること。そして、英語学習でも教科学習でも学ぶ姿勢が身についているのかなと思った。

英語の授業が苦痛だった中学生時代のことを思い出した。英語堪能な教師だったが、先生が英語で問うているのだが、何を聞いているのかわからない。試験も文法づけ。八町小学校の児童たちはなんと楽しく英語を使って授業をしているのだろうと。

牧之原市「図書交流館いこっと」

2021年に開設した「図書交流館いこっと」は、1年目の来館者目標5万人を超えて11万5千人になったという。

テナントとして入居していたホームセンターをオーナー企業が所有した建物「ミルキーウェイスクエア」に一角を牧之原市が賃料を支払う市直営の図書館である。

民間の建物の中に図書館エリアと民間エリアがあるが、境界はない。ユニークな図書館である。建物の中に子育て支援センターもある。そこで仕事をしている会計年度職員の方に話を聞いた。「放課後になると、小学生たちが遊びに来ますよ。」子育て支援センター相良だよりをいただいたが、様々な催しのカレンダーを見ると、親子連れなど多くの市民が訪れる場所になっていることがわかる。お菓子を食べながら、自分が持ってきたゲーム機で遊んでいる数人の子どもたちに感想を聞いた。

「ウン、ここは面白いからよく遊びに来るよ。特に、」

ネット上に“民間部分に図書館が出張、空間も運用も開放的”と紹介されているが建物に入ったときどこに図書館があるのかなという感じだった。

おしゃべりをしている、飲み物を飲んでいい図書館は、子連れの家族は気兼ねなく立ち寄れる場所となっている。静かに読書できる防音付きの部屋もきちんと整備されていた。

18カ月で図書館を完成させたのは、これにかかわった職員の奮闘ぶりが伝わってきたが、市民が参加する「図書館協議会」では、パブリックコメントに177件のなかで思いを最も要望が強かった「図書館が居場所であってほしい」ことだった。企業や団体などの「雑誌スポンサー制度」で雑誌の購読料を負担いただいている。雑誌カバーに公告、スポンサー名を掲載している。市民・事業者参加のまちづくりが行われている。「いこっと」の場所は、スーパーマーケットやドラッグストアやカフェ、飲食店などがあることも有利な条件を生かし市民サービスをしている。

「読書週間」が27日から始まったが、文化庁の2023年「国語に関する世論調査」によると1カ月に1冊も「読まない」が約63%と多数とのこと。その主な原因がスマホなどで時間が取られる、仕事や勉強で忙しくて読む時間がないなどをあげている。インターネットの情報に頼ると、自分の関心のある偏った情報しか入って来なくなるが、自分が今まで知らなかった新しい情報を得て関心を持ってもらう図書館の役割がある。伊豆市の図書環境は、市役所と隣接している。市民が利用する場ではあるが、地域の賑わいの場として一工夫必要かなと考える。